

# 『日本書紀』 継体紀・近江毛野臣 朝鮮派遣記事の検討

高 寛 敏

## はじめに

『日本書紀』(以下、書紀とする)継体紀二三・二四年(529・530)条に著録されている近江毛野臣朝鮮派遣記事は、六世紀前半の朝鮮南部諸国と倭国の政治的動静を伝える貴重な史料であるが、その解釈には不明瞭な点が多い。毛野臣派遣の理由と目的、出発と帰国の年次、事件の展開過程など、どれをとっても完全な一致に達しているとはいいがたい。この問題を解明するためには、関連記事の史料批判を一層徹底させることが肝要であるが、その最善の方法は記事の原典を追求することであろう。もちろん、多くの先学がそのために折にふれて原典について言及してきたのであるが、それは結論としては、百済系や加羅系の史料が利用されているという、一般的推測の域にとどまったのが実状と思われる。そこでここでは原典追求を軸にして、毛野臣派遣事件の実相について迫ってみたいと考える。

## 1. 毛野臣派遣記事の原典

継体紀二三・二四年条は、年月日によって区別された8項目の記事からなる。その主人公は近江毛野臣であるが、隠れた主人公として任那王己能末多干岐と加羅の阿リス等がいる。己能末多干岐の「己」は「已」の誤刻で、その名は、『東国輿地勝覧』巻二九・高霊県・建置沿革条の分注に引く崔致遠『釈順応伝』にみえる、大加羅異腦王の名と一致する。内容からみても、己能末多干岐は任那王でなく、大加羅王であり、間違いなく異腦王のことである<sup>①</sup>。加羅の阿リス等の加羅も大加羅で、しかも垂仁紀二年条の

都怒我阿羅斯等などの例から、阿リス等とは君主の意の一般的名詞であるととれ、加羅の阿リス等とはやはり大加羅異腦王である可能性が強い。それに決定的なことは、この大加羅の主人公である二人は、同項目の記事にともに登場することは決してないということである。このことから、8項目の記事は、大加羅王を己能末多干岐とする原典と阿リス等とする原典を組み合わせでなったことが予測される。そこで前者を仮りにA本、後者をB本とし、それぞれの原典を利用した記事をA・B、そのいずれともいえない記事をCとして類別する。なお、吉士老や調吉士という人物、加羅という国名もBだけにみえるので、その関係記事もBに属することになる。

B〔1〕廿三年(529)春三月、百濟王謂下哆唎国守穗積押山臣曰、夫朝貢使者、恆避嶋曲(分注。謂海中嶋曲崎岸也。俗云美佐祢)、每苦風波。因茲、濕所齋、全壞无色。請、以加羅多沙津、為臣朝貢津路。是以、押山臣為請問奏。

B〔2〕是月、遣物部伊勢連父根・吉士老等、以津賜百濟王。於是、加羅王謂勅使云、此津、從置官家以來、為臣朝貢津涉。安得輒改賜隣国。違元所封限地。勅使父根等、因斯、難以面賜、却還大嶋。別遣錄史、果賜扶余。由是、加羅結僂新羅、生怨日本。加羅王娶新羅王女、遂有兒息。新羅初送女時、并遣百人、為女從。受而散置諸県、令着新羅衣冠。阿リス等、嗔其變服、遣使徵還。新羅大羞、讎欲還女曰、前承汝聘、吾便許婚。今既若斯、請、還王女。加羅己富利知伽(分注。未詳)報云、配合夫婦、安得更離。亦有息兒、棄

之何往。遂於所經，拔刀伽・古跛・布那牟羅，三城。亦拔北境五城。

- C〔3〕是月，遣近江毛野臣，使于安羅。勅勸新羅，更建南加羅・喙己吞。百濟遣將軍君尹貴・麻那甲背・麻鹵等，往赴安羅，式聽詔勅。新羅，恐破蕃国官家，不遣大人，而遣夫智奈麻礼・奚奈麻礼等，往赴安羅，式聽詔勅。於是，安羅新起高堂，引昇勅使。国主隋後昇階。国内大人，預昇堂者一二。百濟使將軍君等，在於堂下。凡数月再三，謀謀乎堂上。將軍君等，恨在庭焉。
- A〔4〕夏四月壬午朔戊子，任那王己能末多干岐來朝（分注。言己能末多者，蓋阿利斯等也）。啓大伴大連金村曰，夫海表諸蕃，自胎中天皇，置内官家，不棄本土，因封其地，良有以也。今新羅，違元所賜封限，數越境以來侵。請，奏天皇，救助臣国。大伴大連，依乞奏聞。
- A〔5〕是月，遣使送己能末多干岐。并詔在任那近江毛野臣，推問所奏，和解相疑。於是，毛野臣，次于熊川（分注。一本云，次于任那久斯牟羅），召集新羅・百濟，二国之王。新羅王佐利遲遣久遲布礼（分注。一本云，久礼爾師知于奈師磨里），百濟遣恩率弥騰利，赴集毛野臣所，而二王不自來參。毛野臣大怒，責問二国使云，以小事大，天之道也（分注。一本云，大木端者以大木統之。小木端者以小木統之）何故二国之王，不躬來集受天皇勅，輕遣使乎。今縱汝王，自來聞勅，吾不肯勅。必追逐退。久遲布礼・恩率弥騰利，心懷怖畏，各歸召王。由是，新羅改遣其上臣伊叱夫礼智干岐（分注。新羅，以大臣為上臣。一本云，伊叱夫礼知奈末），率衆三千，來請聽勅。毛野臣，遙見兵伏圍繞，衆數千人，自熊川，入任那己叱己利城。伊叱夫礼智干岐，次于多々羅原，不敬婦待三月，頻請聞勅，終不肯宣。伊叱夫礼智所將士卒等，於聚落乞食。相過毛野臣僂人河内馬飼首御狩。御狩入隱他門，待乞者過，捲手遙擊。乞者見云，謹待三月，佇聞勅旨，尚不肯宣。惱聽勅使。乃知欺誑，誅戮上臣矣。乃以所見，具述上臣。上臣抄

掠四村（分注。金官・背伐・安多・委陀，是為四村。一本云，多々羅・須奈羅・和多・費智為四村也），盡將人物，入其本国。或曰，多々羅等四村之所掠者，毛野臣之過也。

- B〔6〕（廿四年—530年）秋九月，任那使奏云，毛野臣，遂於久斯牟羅，起造舍宅，淹留二歲（分注。一本云三歲者，連去來歲數也），懶聽政焉。爰以日本人与任那人，頻以兇息，諍訟難決，元無能判。毛野臣樂置誓湯曰，實者不爛，虛者必爛。是以，投湯爛死者衆。又殺吉備韓子那多利・斯布利（分注。大日本人，娶蕃女所生，為韓子也），恆惱人民，終無和解。於是，天皇聞其行狀，遣人徵入。而不肯來。顧以河内母樹馬飼首御狩，奉詣於京而奏曰，臣未成勅旨，還入京鄉，勞往虛歸。慙慙安措。伏願，陛下，待成国命，入朝謝罪。奉使之後，更自謨曰，其調吉士，亦是皇華之使。若先吾取婦，依實奏聞，吾之罪過，必應重矣。乃遣調吉士，率衆守伊斯枳牟羅城。於是，阿利斯等，知其細碎為事，不務所期，頻勸婦朝，尚不聽還。由是，悉知行迹，心生齷背。乃遣久礼斯己母，使于新羅請兵。奴須久利，使于百濟請兵。毛野臣聞百濟兵來，迎討背評（分注。背評地名。亦名能備己富里也）。傷死者半。百濟，則捉奴須久利，桎械枷鎖，而共新羅圍城。責罵阿利斯等曰，可出毛野臣。毛野臣，嬰城自固。勢不可擒。於是，二国凶度便地，淹留弦晦。築城而還。號曰久礼牟羅城。還時觸路，拔騰利枳牟羅・布那牟羅・牟雌枳牟羅・阿夫羅・久知波多枳，五城。
- B〔7〕冬十月，調吉士至自任那，奏言，毛野臣為人傲倨，不閑治體。竟無和解，擾亂加羅。倜儻任意，而思不防患。故遣目頼子，徵召（分注。目頼子未詳也）。
- C〔8〕是歲，毛野臣，被召到于对馬，逢疾而死。送葬尋河，而入近江。其妻歌曰（下略）。

8項目の記事でまず注目されるのは、A〔5〕に「一本」引用分注が初めから終りまであり、

その大部分が固有名詞に関してのものであることである。このことは、A〔5〕相当記事を記した原典が複雑であったことを確証している。そこで固有名詞分注引用の「一本」の性格を追求する必要が生ずる。

鍵となるのは、A〔5〕本文「次于熊川」とその分注「一本云、次于任那久斯牟羅」である。分注の久斯牟羅は、B〔6〕本文に「毛野臣、遂於久斯牟羅、起造舍宅」と出ている。「牟羅」はB〔2〕に布那牟羅、B〔6〕に伊斯牟羅・久礼牟羅・布那牟羅など、B本系だけに瀕出する地名語尾である。また、B〔6〕には「任那」の語が瀕出するから、B本では久斯牟羅に任那の二字が冠されていたと考えて不安はない。「次于任那久斯牟羅」の一句をもつ「一本」とは、B本であると断定してよいのである。

このように、毛野臣関係記事が、已能末多関係記事と阿利斯等関係記事とに截然と区別され、しかも已能末多関係記事に阿利斯等関係記事原典が「一本」別伝として付注されていることからして、毛野臣関係記事にA本とB本の二本の原典が存在したことは確実で、そしてまたA本関係記事での「一本」とはB本であり、B本関係記事での「一本」とはA本であるということも立証されるのである。

さて、A〔4〕は後述のように書紀の潤色が多いが、已能末多干岐が新羅の侵入を訴えて救援を求めた内容であるから、それに続くA〔5〕の毛野臣熊川入りは、それに関係することが明らかである。B〔2〕は、大加羅が新羅と対立するようになった経緯を記しており、B〔6〕は毛野臣久斯牟羅入りを伝えているから、B〔2〕とB〔6〕の間には大加羅が倭に救援を求めるB本記事があったことは確実である。A〔4〕の分注に「言已能末多者、蓋阿利斯等也」とあるのは、それに関係すると思われる。つまり、B本には阿利斯等救援要請記事があり、付注者はその要請者がA本では已能末多干岐、B本では阿利斯等になっていたもので、任那王と加羅王との相違があるにもかかわらず、両者を同一人物と判断してこの分注を付したのである。この判断はやはり正確であって、最早、この両者を同一人物と断定することに躊躇する理由はないであろう。

それでは、A本・B本とは具体的にはなんであったかということであるが、それに迫るためには、その前に、A〔5〕にはB本記事が部分的に採用されているという事実を指摘しておかねばならない。

A〔5〕の「四村」分注は、その内容として金官以下の四村をあげる所伝と、多々羅以下の四村をあげる「一本」所伝を注記している。金官以下の四村名はA本にあり、それを本文完成者が分注形式にしたのである。四村のなかに背伐があるが、それはB〔6〕では背評となっていることから、それがA本記事であることが傍証される。そうすると、A本にはない多々羅を筆頭にした四村名をあげた「一本」とは、まごうかたなくB本である。ところが最後の本文、「或曰、多々羅等四村之所掠者、毛野臣之過也」は、「多々羅等四村」と、多々羅を代表とする四村としているから、これはB本記事が本文になっているのである。「或」=「一本」なのである。そしてこの最後の一文は、毛野臣を非難する内容であることに留意されるのである。

A〔5〕とB〔6〕に共通して登場する人物に馬飼首御狩がいる。A本系とB本系に重出するのはこの人物だけであり、その用字法も完全に一致している。A〔5〕の御狩記事は説話的事実とは考えがたいが、それは御狩の失策譚であり、究極のところは毛野臣の失敗譚の一つである。ここでも毛野臣は非難されている。

B〔6〕は、毛野臣が政務を怠ったことから始まり、誓湯を置いて多くの人を殺したこと、天皇の使いの調吉士の帰国を妨害したこと、阿利斯等と対立して争乱を起こしたことなどを糾弾しており、さらにB〔7〕では「毛野臣為人傲佞、不閑治体」に始まり、調吉士があらん限りの非難の言葉を浴せている。B本の内容と用字法からして、A〔5〕の馬飼首記事は「多々羅等四村」記事と同じく、B本記事に基いているといつてよい。B本は誓湯の話など、説話的文飾が著しいが、A〔5〕の馬飼首記事はその点でもB本にふさわしい。

こうしてみると、A本とは比較的簡単なもので、それも新羅と談判するなど（百濟については後述）、毛野臣がよく働いたが、新羅の大軍の

前に如何ともなしえなかったということで、毛野臣にたいして肯定的であることがわかる。C〔8〕は、毛野臣が帰国途中、対馬で病死し舟で近江に運ばれたという後日譚を伝え、その妻の哀歌をも加えている。C〔8〕はA〔8〕としてよく、A〔5〕に続く記事であることに疑問はない。A本とは、まさしく近江臣氏所伝と判断されるのである。

一方、B本は、大加羅が百済と新羅の両国と対立したことから説きおこし、そのことと関連して毛野臣が派遣されたこと（C〔3〕の安羅派遣については後述）、それに続いてA〔5〕相当記事があり、さらにB〔6〕・B〔7〕と比較的長文で、説話的要素が強く、毛野臣の無能と失政を秋霜のごとく糾弾する記事が続く。その検察官は調吉士である。調吉士はB〔6〕で「皇華之使」として登場するが、調吉士が事実を報告するならば、「吾乃罪過、必応重矣」と恐れた毛野臣が、その帰国を妨害し、調吉士をして伊斯枳牟羅を守らしめたとある。そしてB〔7〕では、帰国した調吉士は、毛野臣を激しく糾弾しているのである。B本とは調吉士所伝、あるいはその帰国報告ということになるであろう。

## 2. 毛野臣派遣事件の真相

毛野臣派遣記事には、A本とB本の二本の原典があったという結論を基にして、次に毛野臣派遣事件の実相に迫ってみたい。

まず毛野臣派遣の理由についてである。

B〔1〕・B〔2〕によると、天皇が加羅多沙津を百済に賜ったので、加羅が日本を怨み、新羅に接近して婚姻を結んだこと、しかしそれも紛糾が生じて、加羅は遂に新羅とも交戦状態に入ったことを記している。

ところが、これと類似のことが継体六年から一〇年にかけて、天皇が百済に己汶・滯沙を賜った話としてみえる。この書紀の己汶・滯沙記事と加羅多沙津記事、それに『三国史記』の関係記事を総合して、田中俊明氏は次のような事実を明らかにした<sup>⑩</sup>。すなわち、己汶と多沙（滯沙）は、大加羅（高靈）を中心とする大加耶連盟傘下の国々で、それぞれ于勒一二曲中に

みえる奇物（任実・南原）と達已（河東）に相当すること、百済が大加羅と争って516年に己汶、522年以前に多沙を奪取したこと、その後、大加羅は新羅に接近して婚姻を結んだが、529年頃に破綻して両国間に紛争が生じたこと、書紀は己汶・多沙を天皇が百済に賜与したと述べているが、倭はこの事件になんの関係もなく、それは書紀の造作であるということである。

田中説によって、B〔1〕・B〔2〕の解釈はほぼ尽くされたのであって、そこに登場する穗積押山臣・物部伊勢連父根なる人物も、書紀の付会であることがわかる。書紀は七年条分注所引「百済本記」にみえる委意斯移麻岐弥を、景行紀五一年八月条の穗積氏忍山宿弥に結びつけて穗積臣押山を作り、九年条分注所引「百済本記」にみえる物部至々連を、垂仁紀の物部連遠祖十千根と合体させ、さらに天皇が十千根ら五大夫に詔して、天照大神を伊勢に移そうとした（垂仁紀二五年条）とある所伝を念頭において、物部伊勢連父根なる人物を案出したと考えられる。

吉士老の場合は少し事情が異なるようである。この人物も本来ここに登場すべき人物でないことは同様であるが、この名前がここに書き入れられたのは、B本が調吉士所伝であるからであろう。B本が調吉士所伝なら、調吉士が闕名になっていること、吉士老に氏名がないことなどが理解しかねる。おそらく、この二人は実は調吉士老という同一人物であろう。一人物の名を二名に分けたのは、吉士老が多沙を百済に与える側、調吉士は大加羅側と、立場が逆になるからであろう。B本の真の主人公は調吉士老で、B〔2〕の吉士老は付会なのである。

要するに、B〔1〕とB〔2〕の前半は、百済が大加羅の多沙津を占領したことを、多沙を天皇が百済に賜与したと改変したため、六年～一〇年条の己汶記事を参考にして、同巧の話を造作したのに過ぎない。したがって、B〔2〕の「生怨日本」は原典の「生怨百済」の変改であることが明らかである。

B〔2〕により、大加羅は百済・新羅の両国と対立するようになった経緯が判明するが、毛野臣派遣は当然この事件と関係があるのである。

ところが、C〔3〕では「遣近江毛野臣，使于安羅。勅勸新羅，更建南加羅，喙己吞」とあって、毛野臣は多沙津事件とはなんの関係もない他の理由で、それも直接には関係のない場所である安羅（咸安）に派遣されている。これをどう考えるかである。

まず確認すべきは、C〔3〕には5人の百済・新羅人名がみえるが、それには「一本」分注が一つもないから、A本かB本のどちらかにはこの記事が全くなかったということである。それでは他の一本にあったのかというと、それも否定的にならざるをえない。なぜなら、この記事はどうみても前後のつながりがないからである。

特に毛野臣派遣理由について、「勅勸新羅，更建南加羅・喙己吞」などというのは、全くの空文である。なぜなら、南加羅（任那加羅，現在の金海・釜山）の滅亡はA〔5〕記事に関係し、A〔5〕以後のことが確実なのであり、まだ南加羅が存在しているのにそれを建てるとするのは矛盾しているのである。C〔3〕に先立って、二一年夏六月条に「近江毛野臣，率衆六万，欲往任那，為復興建新羅所破南加羅・喙己吞，而合任那」とあり、二一年に毛野臣が同じ目的で出発したが、筑紫国造磐井に遮ぎられたとあるのも、やはり同様の空文である。毛野臣の最初の出発が二一年条にかけられている点については後述するが、要するにそれは事実ではなく、二一年条に毛野臣と磐井が互いに応酬しあったとあるのも、机上の作文に過ぎない。

その他の部分でもC〔3〕に史料的价值を見出すことは困難である。別稿で詳論するが、「蕃国官家」という表現は、神功五一年条の「西蕃」、雄略二〇年条の「日本国之官家」など、書紀の舞文にしかない表現である。百済の將軍君尹貴・麻那甲背・麻鹵などの人名は、欽明二年夏四月条の下部中佐平麻鹵，同四年一二月条の中佐平木麻那・下佐平木尹貴など、「百済本記」所出らしい人名を適当に集めたものであろうし、新羅の夫智奈麻礼・奚奈麻礼などは造作の痕が歴然としている。末松保和氏は<sup>③</sup>、欽明二年夏四月条の聖明王の言葉に、「而今被誑新羅，使天皇忿怒，而任那憤恨，寡人之過也。我深懲悔，而

遣下部中佐平麻鹵・城方甲背味奴等，赴加羅，会于任那日本府相盟。以後，繫念相統，因建任那。」とあるが、これはA〔3〕の麻鹵，味奴（麻那）と人名が一致するから、この時のことを回想した言葉で、それは殆んど史実であると論じた。末松説はほぼ通説化しているが、それはこじつけである。なぜなら、聖明王の言葉は任那（南加羅）滅亡以後のことを語っていることが明白であり、毛野臣派遣は南加羅滅亡以前のことには属するからである。また麻鹵・味奴は加羅に行ったのであり、安羅に行ったのではない。味奴が麻那と同一人物であるというのも根拠がなく、C〔3〕ではトップに名のあがっている尹貴君は聖明王の言葉には出てこない。

一体、毛野臣が百済と新羅を安羅に召集するということ自体、また「百済使將軍君等，在於堂下。凡数月再三，謨謀乎堂上。將軍君等，恨在庭焉」などということ、当時の歴史的現実には即してどう説明するのかであるが、それは不可能であろう。百済，新羅二国召集のことは、B〔2〕の原文では大加羅がこの両国と対立するようになったとしていたので、このことを念頭において作文したのであろう。要するに、C〔3〕は史料的根拠がなにもなく、それは徹頭徹尾、書紀の舞文なのである。それはまたA〔4〕の分析によっても確認されよう（後述）。

ところが大山誠一氏は、C〔3〕の安羅会議とA〔5〕の毛野臣の百済・新羅召集は、同事実か一連のものであるとし、甚しくは毛野臣は安羅に二年間在留し、任那日本府の基礎を築いたと説く<sup>④</sup>。もちろん、大山氏は任那日本府をかつてのようには考えないが、C〔3〕とA〔5〕を同一視するなどは、史料の扱いがあまりにも恣意的であろう。両者に類似点・共通点があるとするなら、それはかえって両者に書紀の潤色が加わっていることを示すに過ぎない。

C〔3〕はA本ともB本とも連続しない、書紀の舞文と断定できるが、それではなぜ書紀は、いかにも唐突な感じを免かれぬ無理な作文を敢て行ったのかが問われる。それは結論的にいって、「安羅日本府（任那日本府）」の覆線として設定されたと考えざるをえない。天皇の直属機関として描かれた「任那日本府」は、欽明二

年(541)になんの説明もなく突如として現われ、読者を混乱させている。安羅の「任那日本府」を現実化するためには、安羅服属譚が不可欠なのであったのである。「任那日本府」が関与した「任那復興会議」は、南加羅、喙己吞の復建を主要目的としており、それはC〔3〕の毛野臣派遣理由としてそのまま表現されている。すなわち、C〔3〕は安羅の「任那日本府」の覆線として作文されたため、「任那日本府」の性格と目的が逆にそこに投影されたのである。そしてまた書紀本文の執筆者には、A〔5〕の四村抄掠事件が南加羅の滅亡記事であるという理解が欠けていたと思われ、そのため、C〔3〕がA〔5〕と矛盾することに気付かなかったのであろう。

C〔3〕が書紀の舞文であるなら、B〔2〕はA〔4〕に直結する。B本にはA〔4〕相当記事があったことは前述した。B〔2〕では大加羅が百済・新羅両国と対立するに至った経緯を述べているから、それはA〔4〕大加羅の救援要請に無理なく連続する。この時点まで、毛野臣派遣はなかったのである。

A〔4〕は、任那王の已能末多干岐が「今新羅……数越境以来侵」と述べて倭に救援を要請したこと以外は、ほとんど書紀の潤文である。「海中諸蕃」「胎中天皇」「内官家」「違元所賜封限」などは歴然としているが、已能末多干岐が来朝して大伴大連金村に会ったというのほぼそれに属する。したがって、ここで確認できるのは、已能末多干岐(阿利斯等)が新羅の侵略に直面し、そのため倭に救援を要請したということだけである。

ここで「任那王」というのは少し問題がある。已能末多干岐は大加羅王であることが確実なのである。だからといって、これを以て大加羅を任那とも称したと考えるのは早計であろう。一方、A〔5〕には任那の語が瀕出するが、それはみな任那加羅で意味が通じ、それはほぼ原典どおりと考えてよい。思うに、毛野臣は任那加羅救援のため任那加羅で活動したので、B本執筆者が大加羅王を任那王と認識したのであろう。

大加羅王の救援要請がA〔4〕に表現されていることから、C〔3〕は書紀の作文であることがわかるが、A〔5〕で毛野臣がA〔4〕の時期よ

りも前に任那にいたように記しているのも、書紀の造作である。毛野臣はA〔4〕の後に派遣されたのであるが、その前に派遣されたとするC〔3〕を作文したため、その矛盾を文章上で解決しようとしたのに過ぎない。「詔在任那近江毛野臣、推問所奏、和解相疑」がそれに該当するが、この時までまだ会ってもいない大加羅王と毛野臣が「和解相疑」というのは、文章としても意味が通じない。しかしそれは、B〔6〕で大加羅王と毛野臣が対立したとする記事を念頭において、書紀が大加羅王と毛野臣をここで関係づけたと考えれば、納得がゆくのである。A〔5〕がA本を典拠とするのは、「於是、毛野臣」からであり、そうあってこそ、A〔4〕とA〔5〕は自然につながるのである。

派遣後の毛野臣の行動については、A〔5〕以下に展開され、それはA〔5〕・B〔6〕と時を追っていくはずであるが、ことはそう単純ではなさそうである。

A〔5〕によれば、派遣された毛野臣は熊川(昌原郡熊川面)に次したことになり、熊川にはB本引用分注「任那久斯牟羅(昌原)」がある。ひき続いてA〔5〕では、新羅軍の来襲を受けた毛野臣が「自熊川、入任那己叱己利城」したとある。ところが、B本の久斯牟羅とはこの己叱己利に他ならないのであって、久斯牟羅はこの己叱己利の分注になって然るべきところである。それが己叱己利城ではなく、熊川に付されたのは、派遣された毛野臣は、A本では熊川に次したとあり、B本では任那久斯牟羅に次したとあったからである。B本の「次于任那久斯牟羅」記事は、B〔6〕の「毛野臣、於久斯牟羅、起造舍宅」部分に該当するのであり、そのB本原文は、「毛野臣、次于任那久斯牟羅、起造舍宅、淹留二歳」などとあったのである。さらにこの「淹留二歳」には「一本」引用分注「三歳」があり、この「一本」はA本であること確実であるから、A本では毛野臣が熊川に次した後、三歳を過したとあったのであるが、それは削除されたことになる。

このように、B本原文の一部を書き変え、A本「三歳」を削除したのは、分注を付しながら本文を完成した段階より前の、稿本の段階であ

る。また後述のように、A〔5〕を二三年条、B〔6〕を二四年条にかけたのも同様である。なぜなら、「三歳」を削除してA〔5〕を二三年条にかけたその同一人物が、「三歳」をこと新しく付注したり、書き変えた「次于任那久斯牟羅」を分注で引用するなどという事態は、考えられないからである。

つまり、次のようなことである。稿本執筆者は、なんらかの根拠(後述)に基づいて、A〔5〕を529年、B〔6〕を530年にかけて。そしてB本の「淹留二歳」を529年から数えての毛野臣活動年限のことと理解し(これは実は正確ではない)て正解とする一方、A本の「三歳」を誤りとして削除した。本文完成者は、稿本を下敷きにしてそれを完成しながら、稿本に対応するA本・B本の異伝を分注に付したので、「三歳」や「次于任那久斯牟羅」が分注に残ったのである。ここで、本文完成者の判断を示すB〔6〕分注の「連去来歳数也」について一言すると、本文完成者は毛野臣活動記事を二年に納めた稿本をそのまま認めているから、「三歳」はやはり「違」と認識したのであって、「連」は前田家本などによって、「違」と訂正するのが穏当であろう。「連」では語法としても如何にも不自然である。その一方で本文の完成者は、A本の「三歳」を捨てきれず、稿本が「淹留二歳」を残して毛野臣記事を二年に納めていたので、それを三年間の意と解し、A〔5〕の二三年条(これがA本では任那加羅での最終年記事)を基準にして、二一年条の毛野臣派遣記事を作成したのであろう<sup>⑥</sup>。南加羅、喙己吞復建のことを記す二一年条とC〔3〕は、この点でも本文完成段階の造作であることがわかり、C〔3〕の作文と関連してA〔5〕で毛野臣が既に任那にいたというのも、同段階での造作であることがわかるのである。

さて、上述のように、大加羅の要請により出兵した毛野臣は、A〔5〕原文によれば、熊川に次して三歳を過し、その後、以下に敘述したことを行ったのであり、B〔6〕原文によると、毛野臣は任那久斯牟羅に次し、「淹留二歳」のことで、その後のことを行ったのである。そうすると稿本は、「次于熊川」と「次于任那久斯牟羅」という同一時を、前者は529年、後者は530年の

ことと解したことになり、またA〔5〕・B〔6〕ともに複数年のことを一年に納めたことになる。このことから、A〔5〕・B〔6〕の書紀の年次は正確とはいえず、年次に関しては別の角度からの検討が必要であることが判明する。

その手がかりはB〔6〕にある。B〔6〕によれば、久斯牟羅での毛野臣は、任務を忠実に実行しなかった(誓湯を置いて多くの人を殺したというのは、毛野臣を悪人にみだてての説話であろう)ので、大加羅王との間に隙が生じた。大加羅王は毛野臣に帰国を勧めたが聴かなかったため、遂に百済と新羅に兵を請うたとある。しかしこれは額面どおりには受けとれない。この時、大加羅は百済・新羅両国と対立し、そのために倭に援軍を求めたのであるから、大加羅王が百済・新羅に兵を請う事態はなかったと断言できる。おそらく、大加羅王と毛野臣が積極的な行動をとらなかった隙を伺い、百済が西方から、新羅が東方から軍事行動を起したということであろう。百済と新羅がともに城を囲んだとあるのも、大加羅王の阿リス等が現地にいたように記しているのも、不正確というより、説話的な展開であると思われる。この時に大加羅を実際に攻撃したのは百済だけである。また「毛野臣聞百済兵来、迎討背評。傷死者半」によれば、毛野臣もこの争乱に巻きこまれたらしい。しかし、毛野臣はあくまでも大加羅の対新羅対策の一環として任那加羅に駐屯していたのであるから、毛野臣が百済と対決したということではないであろう。百済と闘ったのは当然、大加羅や安羅であったはずである。背評はA〔5〕の抄掠四村中に背伐としてみえているように、任那加羅の地名であって、この時、百済がここまで進撃してきたとは考えられない。背評で多少の戦闘があったとしても、「傷死者半」という事態はなかったであろう。毛野臣が大打撃を受けたなら、後述のように、毛野臣はこの後で新羅と対決するということとはできなかったに違いない。B本はなにごとくも毛野臣の失敗に帰する傾向があり、背評のこともその例外ではないというべきであろう。

B〔6〕の最後は、百済が大加羅から久礼牟羅城とその他の「五城」を抜く記事である。久礼

牟羅城は、欽明五年(544年)三月条の百濟聖明王の言のなかに、「新羅春取喙淳。仍擯出我久礼山戌」とみえる久礼山戌のことで、この一文でわかるように、後に新羅が百濟から奪取している。したがって、B〔6〕で久礼牟羅城などを抜いたのは百濟であって、新羅ではない。久礼牟羅城戦闘に新羅が参加しているように書かれているのは、やはり事実ではないのである。

ここに久礼牟羅城がみえるのは、重要なヒントになる。久礼牟羅城は安羅(咸安)の東方、久斯牟羅(昌原)の西方にあった<sup>⑨</sup>からである。継体二五年冬一二月条分注所引「百濟本記」に、「太歳辛亥三月、軍進至于安羅、營乞毛城」とあるのによれば、百濟は531年に安羅に進駐し、乞毛城をも占領している。久礼牟羅城は安羅東方であるから、百濟の久礼牟羅城占領は安羅進駐以後のことで、音と内容の類似からすると、久礼牟羅は「百濟本記」の乞毛城のことと考えられる。このようにB〔6〕の後半記事は「百濟本記」の531年記事と同一事を記しており、したがってそれは531年記事なのである。そうすると、久礼牟羅城陥落は、毛野臣久斯牟羅入りより「淹留二歳」、すなわち満二年以後に起っているから、B本では毛野臣久斯牟羅入りは529年となる。

B〔6〕が529～531年記事とすれば、なぜ、それは530年一条にかけられたかであるが、530年は調吉士派遣年としてB本にあったからであろう。その後の事件の顛末は一つの話としてまとめられたと考えられるのである。B本は調吉士所伝であるから、B本とにとって最も重要なのは、この年であって、B〔6〕では、最初に任那使の報告があり、それを聞いた天皇が人を遣わして毛野臣を徴したとあって、その後に突然として任那に滞留する「皇華之使」調吉士が登場する。したがって、この「人」とは調吉士のことになり、さらにその前の「任那使」も同様に考えてよいと思われる。本文執筆者は、調吉士派遣記事を削除したので、このような表現に変えたのであろう。要するに、529年に毛野臣が派遣されたが、530年にその間の情勢を把握するために調吉士が派遣されたのである。調吉士は531年に一時帰国して毛野臣「淹留二歳」の勤務報

告をした(「任那使奏」)後、すぐに任那に帰ったが、その直後に百濟の軍事行動があったことになる。「百濟本記」の「太歳辛亥三月」を生かすならば、百濟の安羅進駐は調吉士帰国直前か、その最中に行われ、再び調吉士が任那に来た後、おそらく年末に近く、百濟が乞毛城(久礼牟羅城)をも占領したということであろう。ともかく、B本には530年の調吉士派遣年だけが明記されていたので、稿本はそれを530年にかけたと思われるのである。

同様なことはA本の毛野臣氏所伝にも考えられる。A本には529年の派遣年が明記されていただけで、その後のことは年次なしに一括されていたのであろう。結局、A本は529年一括記事、B本は年次なしのB〔2〕+530年一括記事であったので、稿本はB本の「淹留二歳」をA本の529年から数えて二年の意と解して正解とし、A本の「三歳」を削除したことになる。しかし、A本の「三歳」はやはり意味があるのであって、A〔5〕の原文は、毛野臣派遣三年後のことを敘述していたに違いない。とすると、それは532年のことになる。

B本にはA〔5〕相当記事があって、それが532年のこととすると、それは本来、B〔6〕の後に継続する記事である。それはB〔6〕の河内母樹馬飼首御狩がA〔5〕では河内馬飼首御狩(B本所出記事)と、より簡略化された表記になっていることでも裏づけられる。また、B〔6〕では毛野臣が背評で百濟軍と闘ったとあるが、それはA本所伝の抄掠四村中の一つ、背伐と同一地で、たとえB本所伝四村中にその名はみえないとしても、背評はA〔5〕で最終的に新羅に抄掠されたと考えてよく、このこともB〔6〕が先行記事であることを証しているのである。

B本でB〔6〕の後にA〔5〕相当記事があったなら、稿本の執筆者も当然、疑問を感じたに違いない。しかし、A本は529年、B本は530年という年次しか具体的に示しておらず、またB本に「淹留二歳」の文字があったので、その年次どおりに記事をつなぎ、B本A〔5〕相当記事の一部をA〔5〕に加えて、類似の残りの記事を削除したのであろう。

A〔5〕は、B〔6〕の531年記事に続く、532年



記事として、次にその具体的な過程を検討することにする。

532年になって、毛野臣は任那加羅方面に侵入した新羅と積極的に対決するようになった。「召集新羅・百濟二国之王」はそれを示すが、もとより毛野臣が新羅・百濟二国王を招集したというのは文飾に過ぎず、談判を申し入れたということであろう。ただ新羅人久遲布礼には「一本云、久礼爾師知于奈師磨里」とあるから、それはB本にもあったことが確認されるが、百濟人の恩率弥騰利には分注がなく、百濟のことはB本にはなかったことがわかる。それではA本には百濟のことがあったかという、それもすこぶる疑問である。なぜなら、A〔5〕は任那加羅を脅やかした新羅との問題を記しているはずで、百濟は関係がなかったからである。毛野臣の任務は対新羅問題であり、それが倭王権の派兵目的でもあった。百濟・新羅二国を召集し、天皇の勅を聴けというのは、既にC〔3〕でみたように、書紀の潤文の特徴なのである。したがって、A本は、毛野臣が新羅使臣とだけ談判したとしていたと考えざるをえない。

これに関連し、「毛野臣大怒、責問二国使云、以小事大、天之道也」について一言しておく必要がある。これには、「一本云、大木端者以大木統之。小木端者以小木統之」とする分注があり、これはB本所出と考えられやすいが、ことはそう簡単ではない。

なぜなら、それは固有名詞にたいする分注ではないから、本文がA本、分注「一本」がB本とは単純にいえず、他の可能性も考えられるからである。

ただし、本文は完成段階の作文ではない。完成段階で分注の表現が気に入らず、新しく本文を作ったとするなら、気に入らない文章をわざわざ分注に付することはないからである。しかし本文が稿本のものなら、付注者がA本かB本をみて、本文と異なる所伝の文章を付注することは考えられる。この場合、「一本」はA本・B本の両方の可能性があるのである。この「一本」の文章は、毛野臣が談判を強硬姿勢で進めたことを強調している。それは毛野臣の無能を強調するB本にふさわしくなく、毛野臣を評価する

A本の立場を反映していると思われる。この「一本」だけはA本である可能性がある。それでも少なくともA本かB本には、「大木端者以大木統之。小木端者以小木統之」という文章があり、それは倭を大国とする観念の表現でもあるから、A本・B本は原史料そのままではなく、既に書紀修史局の手が一次的に加わっているとみた方がよさそうである。

本論に立ち返ると、毛野臣は新羅と談判しようとしたが、新羅は責任ある人物を送らず、機を伺って伊叱夫礼智干岐（B本の伊叱夫礼知奈末、『三国史記』の異斯夫）の率いる三千の軍勢を派遣した。毛野臣は己叱己利城に入り、伊叱夫礼智干岐は多々羅原に次して対峙した。その次の河内馬飼首御狩の話は、先述のようにB本に基いているが、天皇の勅を聞くという問題になっているのは、やはり書紀の潤色であろう。結局、対峙すること三月にして、新羅は任那加羅四村を抄掠し、決定的な打撃を与えたのである。それが任那加羅滅亡につながったことは、『三国史記』新羅本紀・法興王一九年（532）条に、「金官国（任那加羅）国主金仇亥……以国帑宝物来降」とあるのによって明らかである。

次はいよいよ結末である。B〔7〕では調吉士が帰国して毛野臣を激しく糾弾する。そこで倭国は目頬子を派遣し毛野臣を召還した。

最後記事のA〔8〕・（C〔8〕）は、毛野臣が帰国途中、対馬で病死し、その遺体が船で運ばれてきたことを記すが、それには妻の哀歌が加えられていて、悲運に死んだ毛野臣を悼んでいる。

以上によって、毛野臣派遣の目的と理由、その出発と帰国の年次、その間の事件の展開過程はほぼ明らかになったと思われる。しかし最後に重要問題が残されている。毛野臣は、大加羅が新羅と対立したのを契機に、大加羅王が倭に救援を求めたのを受けて派遣されたのであるが、なぜ大加羅のためでなく、任那加羅のために動いたのかということ、換言すれば、大加羅王はなぜ任那加羅の問題を自身の問題として考えたのか、またなぜそうする権限をもっていたのかということである。このことは、大加羅連盟が実質的には任那加羅をも包括していたこと

を前提にしなければ、理解しがたいことである。

510年頃に于勒が製した加耶琴二曲中には、任那加羅や安羅は含まれていなかった。この両国を除外した範囲で連盟は結成されていたのである。問題は、大加耶連盟のその後の推移に移ることになる。しかし遺憾ながら、この点について明らかにしてくれる直接の史料はない。そこで加耶諸国をめぐるその後の情勢を概括しながら、この点について推測しておきたい。

522年以前に百済は多沙を占領したから、この頃、安羅は既に百済の脅威に直面していた。百済に対抗するという点で大加羅と安羅の利害は一致しており、特に小国の安羅にとって、大加羅との統一戦線は切実な課題になっていたと考えられる。

また、522年に大加羅と婚姻同盟を結んだ新羅は、それを好機として任那加羅攻略に本格的に乗り出したことが考えられるが、新羅と大加羅が新しく対立するようになってからは、対新羅という点で、大加羅と任那加羅の利害もまた一致し、そこでも小国の任那加羅が大加羅を盟主とする大加耶連盟に依存する関係が形成されたと考えられるのである。大加羅と新羅の対立は、B〔2〕では529年にかけているが、それは実際は毛野臣派遣年である。したがって、大加羅と新羅の対立、大加羅の救援要請は、それより少なくとも一・二年前のことであろう。おおまかにいって、520年代の後半ということになる。その頃、百済と新羅の侵略に直面した加耶諸国は、大加羅を盟主として結束する以外に、生存の道は残されていなかったと推測されるのである。

一方、大加羅王は大加耶連盟結成後間もない五世紀末頃、那奇陀甲背の子、加猶直岐甲背（一名、鷹奇岐弥）を倭に派遣し<sup>⑧</sup>、倭国との接近を計った。それは、近江出身で、近江や北陸の加耶系移住民勢力と密接な関係のあった継体<sup>⑨</sup>が507年に即位したことで、一層強まったことが考えられる。

このような前史をふまえて、大加羅王は新羅の任那加羅攻撃に対処するため、倭に救援を要請したのであろう。継体が加耶勢力と関係が深かったとはいえ、倭国の従来の親百済・反新羅

路線には大きな変更がなかったわけであるから、毛野臣派遣は任那加羅救援がその目的であったのであり、毛野臣はそのため任那加羅の熊川に滞留したのである。

しかし、毛野臣は大加羅王の期待どおりには動かず、消極的な態度に終始したらしい。そうこうしている間に531年、百済は安羅に進駐し、さらにその東方の久礼牟羅城などをも占領した。それに呼応して新羅も任那加羅攻略を本格化させたのである。そこでやっとな腰をあげた毛野臣は532年、談判によってそれを阻止しようとしたが、結局は失敗したことになる。新羅軍三千の前に、任那加羅も毛野臣もなす術がなかったとするなら、毛野臣の軍勢は推して知るべきである。

## おわりに

近江臣毛野の朝鮮派遣は、従来一部でいわれてきたような、倭王権の朝鮮南部失地回復のためでもなく、倭王権の独自の軍事行動でもなかった。それは大加羅王の要請によるものであり、その目的は新羅による任那加羅攻略を防ぐためのものであった。それはまた歴史的に積みあげられてきた、倭王権の親任那加羅政策の延長でもあったのである。毛野臣は529年に任那加羅に派遣されたが、結局、532年の任那加羅滅亡を目撃しただけで、なんらの成果をもあげることができなかった。それが後の「任那日本府」につながる要素は皆無といつてよい。

しかし、継体紀の毛野臣派遣記事の原典は、任那加羅滅亡前後の百済・新羅と加耶諸国、それに倭を加えての激動の政治情勢を具体的に伝える、まことに貴重な史料なのである。

毛野臣派遣を間に挟んで、加耶諸国滅亡に至るまでの古代朝日関係史には、重要な前史と後史がある。それは書紀引用の「百済三書」の分析を通じて解明されねばならないが、それについては近く私論を公表することを期して擱筆としたい。

注

- ①田中俊明「于勒十二曲と大加耶連盟」（『東洋史研究』48-4, 1990年）。シンポジウム報告「朝鮮の王権をめぐる諸問題」（『朝鮮学報』140, 1991年）での田中氏報告
- ②田中俊明 注①論文
- ③末松保和『任那興亡史』吉川弘文館, 1949年, 136ページ。
- ④大山誠一「所謂『任那日本府』の成立について」（上）・（中）・（下）（『古代文化』32-9・11・12, 1980年）。
- ⑤「任那王」の用例は雄略紀八年春二月条にもみえる。そこに記された高句麗・新羅関係については典拠があると思われるが、「任那王」の部分是中国古典の引用が多く、「任那王」は書紀の潤色であろう。これについては、いずれ詳説したい。
- ⑥三品彰英「『継体紀』の諸問題」（『日本書紀研究』第二冊, 塙書房, 1966年）は、この「三歳」に注目し、「逆算して二一年という年次を推定したのであろう」と指摘したが、その逆算の基準が必ずしも明確でない。
- ⑦金泰植「6世紀前半, 加耶南部諸国の消滅過程考察」（『韓国古代史研究』I, ソウル, 1988年）。
- ⑧山尾幸久『古代の日朝関係』塙書房, 1989年, 141ページ。
- ⑨山尾幸久『日本古代王権形成史論』岩波書店, 1983年, 453~462ページ。